

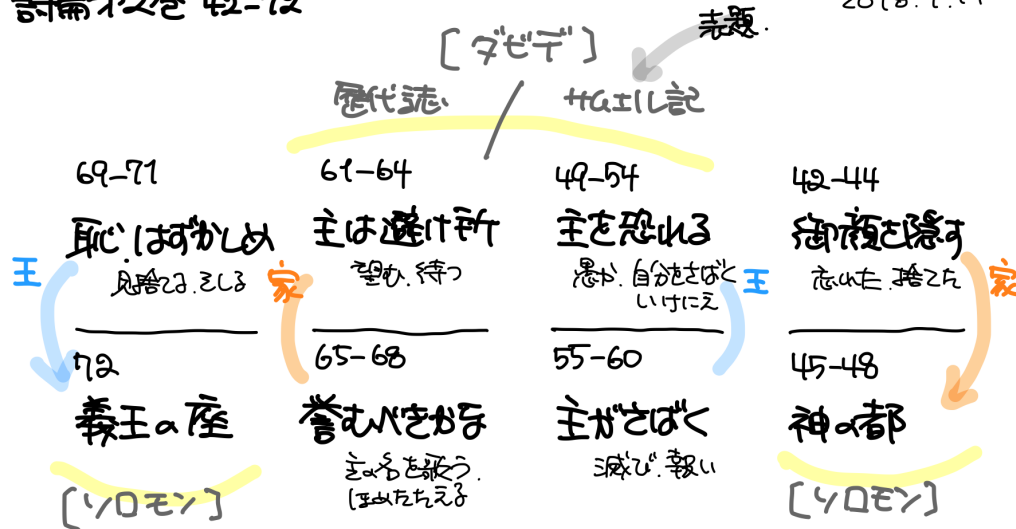


詩篇第2巻

詩篇42-72篇の配列構造

詩篇第2巻 42-72

2018.7.11



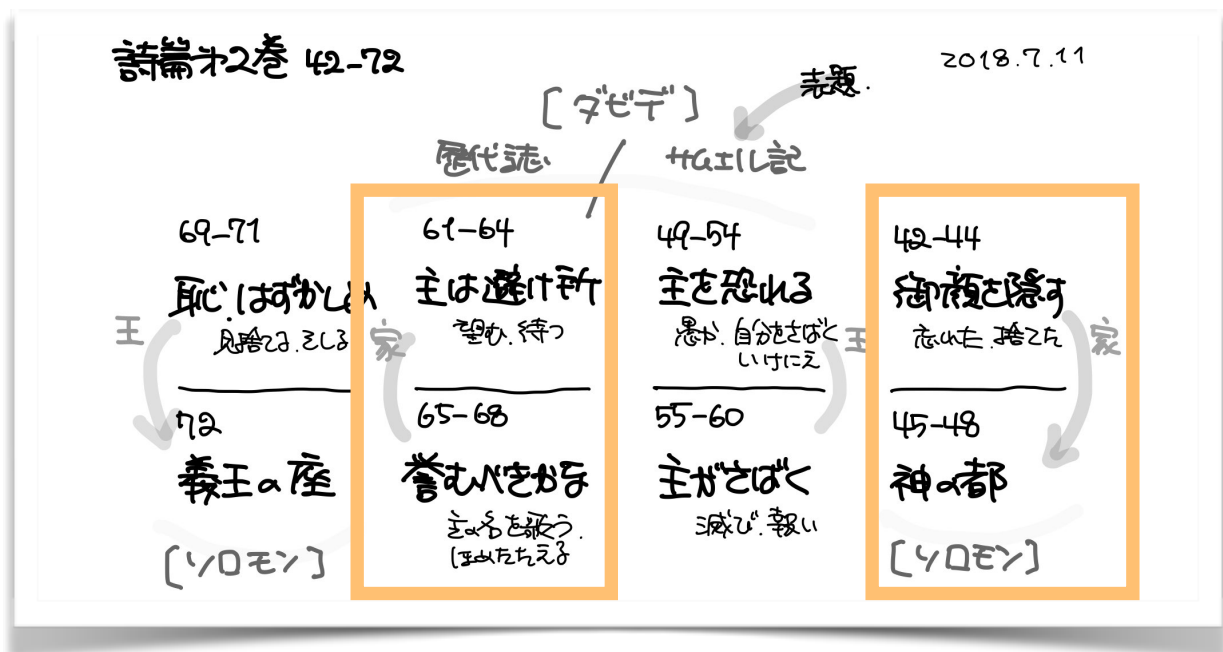
詩篇第2巻の分析をもう一度しています。42篇から72篇。まだ途中です。途中経過の説明です。

42篇から72篇が大きく分けて、1つ、2つ、3つ、4つということで、4つの段落、それぞれ2つのパーツでできているというように見えています。詩篇第2巻は、特にダビデからソロモンへという、ダビデの子が王となるということについて教えているところだと思います。そのダビデの子が王座に就くという話と、その王座に就いている家は世々限りなく栄える。その王と家の約束が第2巻の配列の大枠だと思います。

まだわかっていないところ、確かめて確定できていないのが、45篇から48篇は神の都で、49篇からだろうと。それで、60篇までと言っているのですが、その形としては、とても似ています。1個(49)、2個(50,51)、2個(52,53)、1個(54)。1つ(55)、2つ(56,57)、2つ(58,59)、1つ(60)というふうに形が似ています。似ている位置に「よみに下らせる、墓に下る、滅びる(55)」「よみに下る、死にます、滅びる(49)」という出だしと、「へび(58)と犬(59)」「欺きの舌(52)」と「愚か者の神はいない(53)」ということば、「いけにえ(50)」「いけにえ(51)」という話があり、「あわれんでください(56)」「あわれんでください(57)」ということで、ここも似ています。信頼について話しているという意味で似ています。そうすると、残っている54篇と60篇は、同じ位置にはあるのですが、似ているものとして見るのだろうか。敵が減びるということなのですけど、そのへんはまだよくわかっていません。

61篇から68篇。これもキーワードで見ると、この4つは、待ち望む。「避け所、御翼の陰、避け所、避け所、御翼の陰」という守られることを待っている話(61篇～64篇)と、「シオンでほめたたえる、ほめたたえる、ほめたたえる」という65篇から68篇がセットだと思うのですが、そのつながりをもう少し見ていかなければいけないと。迷っているのは、49篇から54篇、55篇から60篇というまとまりで見ていいかどうかというところが確定できていないので、まだ細かいところまで入っていないということです。42篇からのこの2つ(42-44,45-48)は、家について、神の都についてが、45篇から48篇にありますので、神の都なのですけど、神の都は、第2歴代誌6:42とかの中にもあるように、神の都は神様が御顔を向けてくれる場所ということです。なので、神様が共にいてそこに顔を向けてくれる場所の反対が、42篇から44篇。御顔を隠しているということです。神様は忘れた、神様は捨てた、神様は見てくれないという問題です。

69篇からのところは、恥、はずかしめ、見捨てられてる、そしられているということに対して、72篇は、義の王様が王座について、全地にその栄光が満ちあふれると言ってあるものなので、恥、はずかしめと王座につくということが、この2つの並行です。

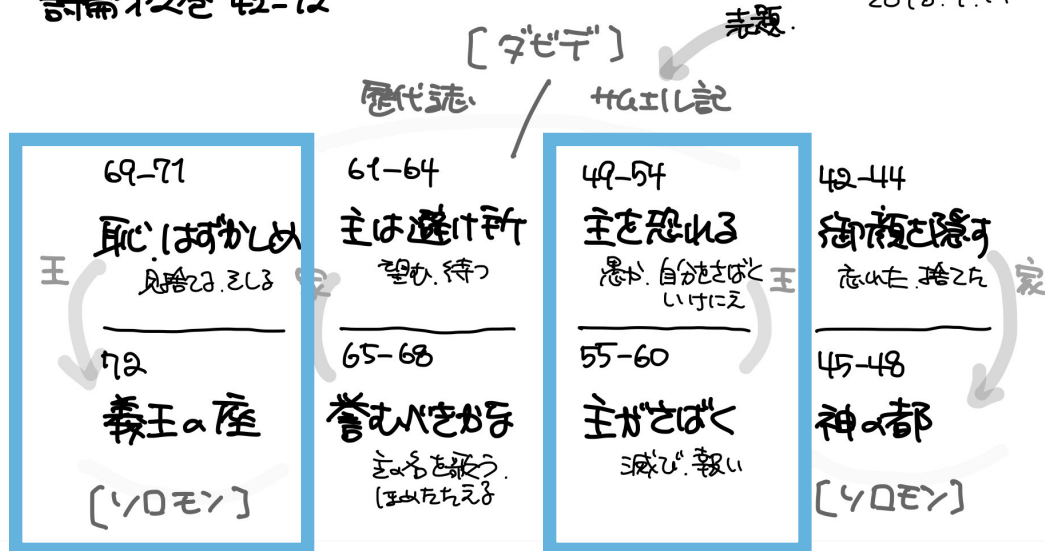


42篇からのところと69篇からのところが、いちばんひどい状態。これ(45篇からと72篇)が、完成の状態です。こちら(42篇からと69篇からのところ)が死んでいる、こちら(45篇からと72篇)が復活して天に昇って右の座についているというような感じだと思います。この問題と解決の間がないと。急に下から上に…逆さまみたいに、急に勝利があらわされているかのような感じですけども…。この間を埋める、恥から王座にと、御名のゆえにはずかしめを受けているところから、御名の栄光をあらわすところまで。御顔を隠されて、捨てられ忘れられていたところから、絶対に共にいるということがあらわされている神の都。ここに至るまでのところが、どうなっているのかということが、真ん中の4つのところであらわされているのではないかと考えています。

42篇からの御顔を隠す話は、それでも避け所を待ち望むという61篇から64篇。待ち望んで、それが神様がその約束の通りに来てくださると主の名をほめたたえるという(65-68)、それで、神の都という、こういう感じ(42-44,61-64,65-68,45-48)です。

詩篇2巻 42-72

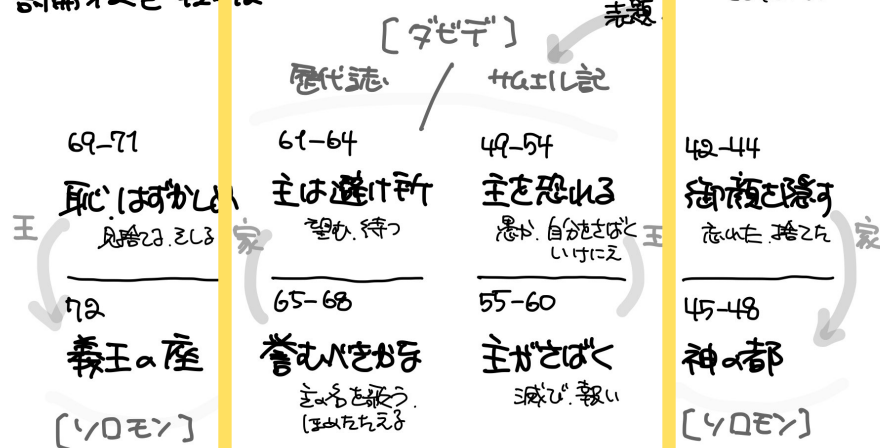
2018.7.11



こっち(69-71)は、恥、はずかしめの話から、(49-54)主を恐れる、自分をさばく、神様がさばいて、その信仰に報いてくださるということを信じて、知恵があるということですね。主を恐れる知恵があるならば、(55-60)神様はこんど敵を滅ぼし、敵に報いを与えるということです。こっちも逆にここ(69-71)から始まって(49-54, 55-60)、義の王座(72)。69の段落、49の段落、55の段落、72。こっちは42の段落、61、65、45というように、交差しているというように見えています。どちらも結論の部分は、ソロモンの王座とソロモンの都だと思えます。

詩篇2巻 42-72

2018.7.11



「ダビデの道を歩むならば」というようにソロモンに言われています。「ダビデの道を歩むならば、その王座は限りなくその家はとこしえまで祝福されます」ということなのですが、そのダビデの道と言っていることが、この真ん中で言われていることかなと思います。ということで、ダビデと書いてあります。

【詩篇タイトル】

- | | |
|---|--|
| 42 指揮者のために。コラの子たちのマスキール | 60 指揮者のために。「さとしは、ゆりの花。」の調べに合わせて。教えのためのダビデのミクナム。ダビデがアラム・ナハラヤムやアラム・ツォバと戦っていたとき、ヨアブが帰って来て、塩の谷でエドムを一万二千人打ち殺したときに |
| 43 | |
| 44 指揮者のために。コラの子たちのマスキール | 61 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデによる |
| 45 指揮者のために。「ゆりの花」の調べに合わせて。コラの子たちのマスキール。愛の歌 | 62 指揮者のために。エドトンによって。ダビデの賛歌 |
| 46 指揮者のために。コラの子たちによる。アラモデに合わせて。歌 | 63 ダビデの賛歌。彼がユダの荒野にいたときに |
| 47 指揮者のために。コラの子たちの賛歌 | 64 指揮者のために。ダビデの賛歌 |
| 48 歌。コラの子たちの賛歌 | 65 指揮者のために。ダビデの賛歌。歌 |
| 49 指揮者のために。コラの子たちの賛歌 | 66 指揮者のために。歌。賛歌 |
| 50 アサフの賛歌 | 67 指揮者のために。弦楽器によって。賛歌。歌 |
| 51 指揮者のために。ダビデの賛歌。ダビデがババテ・シェバのもとに通ったのちに、預言者ナタンが彼のもとに来たとき | 68 指揮者のために。ダビデの賛歌。歌 |
| 52 指揮者のために。ダビデのマスキール。エドム人ドエグがサウルのもとに来て、彼に告げて「ダビデがアヒメレクの家に来た。」と言ったときに | 69 指揮者のために。「ゆりの花」の調べに合わせて。ダビデの調べ |
| 53 指揮者のために。「マハラテ」の調べに合わせて。ダビデのマスキール | 70 指揮者のために。ダビデによる。記念のために |
| 54 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデのマスキール。ジフの人たちが来て、「ダビデはあちらの所に隠れているではないか。」とサウルに言ったとき | 71 |
| 55 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデのマスキール | 72 ソロモンによる |
| 56 指揮者のために。「遠くの人、もの言わぬ鳩」の調べに合わせて。ダビデのミクナム。ペリシテ人が、ガテでダビデを捕えたときに | |
| 57 指揮者のために。「滅ぼすな。」の調べに合わせて。ダビデのミクナム。ダビデがサウルからのがれて洞窟にいたときに | |
| 58 指揮者のために。「滅ぼすな。」の調べに合わせて。ダビデのミクナム | |
| 59 指揮者のために。「滅ぼすな。」の調べに合わせて。ダビデのミクナム。ダビデを殺そうと、サウルが人々を遣わし、彼らがその家の見張りをしたときに | |

49篇から55篇から。ここで見るのが…詩篇に表題がついています。この表題は本文と同じくらい古いということなのですが、本文だとは思われていない。それで、字が小さく書いてあったりします。その表題は、確実に「ダビデによる」というとき、ダビデが書きましたと言えるほど確かなものではないと言われています。ここに出ている、特に51篇、52篇、54篇…このへんにダビデがこういう事件、出来事にあつているときに書きましたと書いてあるのですけれど、これも、役に立つものではあると思うのですけれども、その事件がそのまま、その詩篇を探るための一番大切な手がかりとはなっていないようです。

題がついていること自体は、間違っているわけでも何でもなく、(例えば)第2サムエル22章。これは、18篇とほぼ同じものを引用している。反対に18篇は、ここから引用されて詩篇の中に入っているということです。22章の最初の「主が、ダビデのすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に、ダビデはこの歌のことばを主に歌った。」と言って、18篇には、そこは引用されています。これは、小さい字で書いてありますけれど、確かなものですね。ここ(第2サムエル22章)で出てきますから。18篇、も

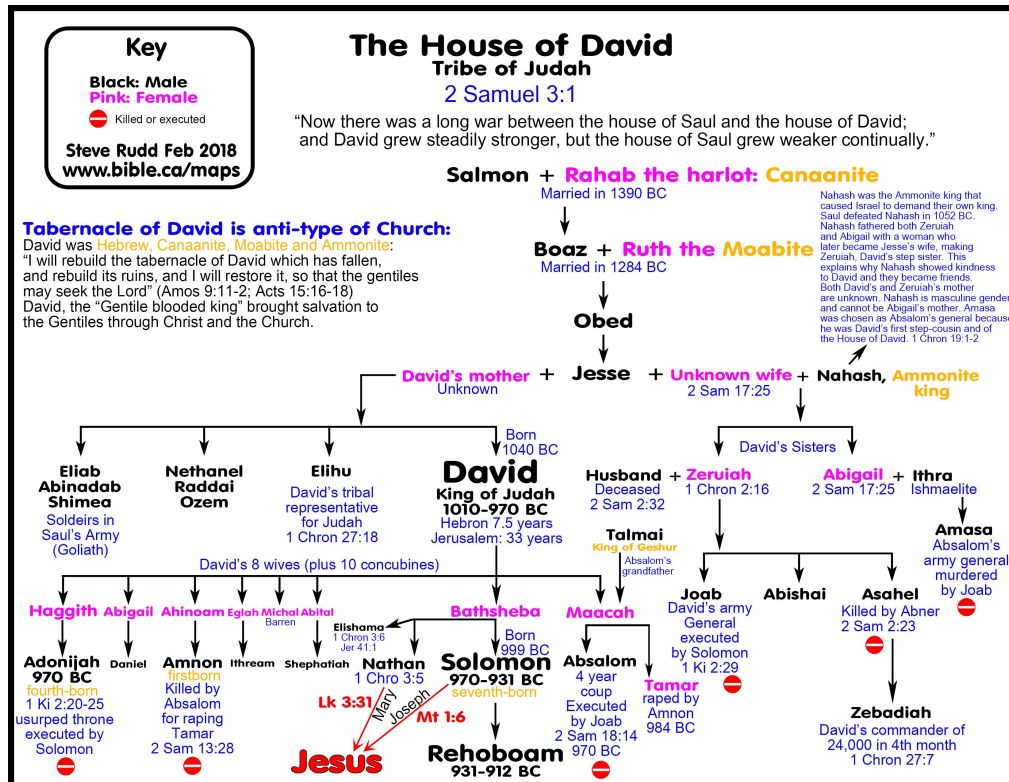
しくは、(第2サムエル)22章を読んでも、もしこの題がついていなかったら、「え、サウルから救い出された日の話なんだ。これは…」っていうくらい、エジプトから連れ出されたような、洪水から救われたような、そんなような詩篇ですので、不思議な題だなと思うくらいだと思うのですが、そのくらい連想する力が、私たちの感覚が旧約聖書に近くないということかもしれません。その意味で、ここに書いてある題が、直接、その話なのと思うような題もついていますけれど、一緒に見なければいけないことは、見ないといけないのだということ。

もしくは、特に49篇から60篇の中に、この出来事の表題が多いのです。ということは、49篇から60篇を見るとダビデの人生を思い出してしまうということなんだと思います。特にダビデの人生と言っているときには、サムエル記になりますから、サムエル記のダビデのストーリーを覚えていないと良くないということです。出だしのところを引用している箇所だけを見たりしています。ドエグが出てきたりします。ドエグはエドム人、欺きの舌というような詩篇を見たときに、そういう人物なのかということを思い出したりするはずのものだと思います。49篇から60篇は、どちらかという、サムエル記のテーマを思い出すのでしょうか。

では、61篇から68篇はどうなのかなということです。それと、題でいうと、73篇からの第3巻。第3巻は、アサフ、アサフ、アサフ、コラの子たち、コラの子たち、エタン。こういうダビデが任命した歌うたいたちの題がちょうどついています。その意味で第3巻はダビデの幕屋の成就ということを書いてある詩篇集であるということが言えると思います。61篇から68篇は、ダビデの賛歌、エドトンによってと、特に一貫しているわけではないのですが、サムエル記の歴史を思い出すよりは、ダビデの天幕、幕屋の礼拝のことを思い出すように書かれているのかなと思います。主は避けどころである、御つばさの陰、こういう言い方は神様の幕屋、神様の天幕に逃げ込むと神様は守ってくれるということをあらわすものですので、その天幕の前で主の名を誉め歌うということがダビデが命令しているところです。

ですから、ダビデの人生の、王としてのサムエル記に書いてある善悪をさばく、公正な裁きを行う知恵ある導きと、特に、歴代誌第1に書いてある(第2の最初のところもそうなのですが)、ダビデが天幕を求めて、その天幕で礼拝をする、主の名を誉め歌うということが書いてあること。これが、ダビデの人生の大きな2つの働きということになるのだと思います。そして、それぞれが、神の都というところで成就し、ソロモンが王座につくというところで成就することなので、ソロモンの時に成就する。一番低いところ(42-44,69-71)から高いところ(45-48,72)に成就する間にダビデの人生(49-54,55-60,61-64,65-68)が歌われているということなのかなということです。

72篇が結論部分のひとつの詩篇になっています。この72篇を見ても、その公正な裁きを行って、主の名がほめたたえられ、全世界でほめたたえられるということがまとまりになっていますので、ダビデの最後の祈りという…ここに、「エッサイ子ダビデの祈りは終わった」とありますけれども、ダビデの最後の相続する祈り、第2サムエルの最後のところ(第2サムエル2:1-7)の祈り、それと、ソロモンにその働きを相続するところ(第1列王記2:5-9)というところが、72篇の背景にあるのではないかと考えて分析をしている途中です。



ほかには、ダビデのストーリーを49篇から60篇のところを特に思い出そうとしたときに、難しいし慣れていないなと思うのは、いろんな人が出てきます。サムエル記を読むときに難しいなと思うのは、人間関係がよくわかりません。みんなアで始まる名前がいっぱいあって、アド、アビ、アド、アマサ、似たような名前もいっぱいあるし、男なのか女なのかもよくわからず、そのへんは慣れていないなと思います。www.bible.caのSteve Ruddさんが書いた人間関係図を見て確認したりしました。この人とこの人は甥になっているけど、こういうつながりなのかとか、Xが書いてあるのは、前に夫がいた人です。夫がいて、夫と離婚、死別して結婚している人がこんなにあるのかと。ルツ。ナハシュの奥さんがエッサイとどうも結婚しているようなのですね。ツェルヤという人が生まれている。バテシェバもヘテ人ウリヤがいました。ミカルは別の人のところへ一回行ってしまいました。ナバルが死んでアビガイルがいて、ラハブもそういうことになるとは思いますが、そんな人たちもいるねというようなことを見ながら…敵ですね。敵は誰なのか、何を攻撃しているのか。犬だったり、蛇だったり、欺きだったり、そのことばの攻撃がものすごいんですね。恥をかかせる話も同じようにはずかしめもことばの話ですから、ことばで信頼を裏切るように導く、だますということが戦いだだったりしますので、こういうサムエル記の人物のつながりというものも見なければいけないのだらうと思います。

表題に関しては、フランススコ会の詩篇の本に表題の説明があつて、面白いなと思ったのは、「新約聖書の中でダビデがこう言っています。」という箇所があるのですけれども、「ダビデがこう言っています。」と言って詩篇2篇、95篇も「ダビデがこう言っています」と言っていますので、95篇にも2篇にもそんな題はついていませんけれど、ダビデの作だということはわかっていたわけですので、題が確かなものなのかどうかは、どうしてついていたか、ついていなかったりするのかは、いろんな研究があるようですが、決定的な、これはこういう意味ですとわかるようなものではないということです。特に、49篇から60篇は、サムエル記を連想しなければいけないということで、王と

してのダビデの歩みを思い出さなければいけない詩篇という意味で、ここにサムエル記の表題がたくさんついていることは妥当かなと思います。

続けて、ここのくくり(49-54,55-60,61-64,65-68)が正しく分けられないとその下の分析を細かくやり過ぎてもだめなので、そこを前回も見ましたけれど、ことばのつながりを見て考えていきましょう。